

「ハレとケ」 通信

第24号

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しむ暮らしをご提案する季刊誌です。

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築

(24)

「複合施設カナンの園新築工事」

「ハレとケ」のある 暮らしかた

【季節に応じた暮らし方／

季節をかたどる吹き寄せ】

中津万象園「花の歳時記」

【観潮楼】



平成26年 秋発行

コスモス。花を生けると「野にあるように」という
言い方をしますが、まさに「野にあるように」
生けるのが一番似合う花です。

「複合施設 カナンの園新築工事」

複合施設【カナンの園】は、社会福祉法人カナン福祉センターが運営する初めての高齢者のための施設。保育所法人として出発したカナン福祉センターらしく、デイサービスと小規模保育園とを組み合わせた、全国でも先進的なビジネスモデルとして整備されました。

木々に囲まれたこの建物は、十字架と聖者を描いた壁画が特徴的で、とても新築したとは思えないほど、しつくりと香南の土地に馴染んでいます。が、それもそのはず。旧【ドミニコ会神の母マリア修道院】の建物を小規模保育園、地域交流センターとして利用し、広い庭園や果樹園はそのままに、優しい雰囲気の有料老人ホームを新築したのが、この【カナンの園】なのです。

今回は、この香南^{かなん}に生まれた新しい“約束の地”をめぐる物語を特集します。

↓カナンの園 全景。右が新築部分。



「カナン福祉センターが、初めて保育園の認可を受けたのは、昭和42年3月10日のこと。

4月に開所予定だったのが建物が間に合わず、定員60名として7月にカナン保育園を開設。以来50年、キリスト教精神を根底に保護者のニーズに応える園として保育を展開してきた。

そのカナン保育園に、現在の理事長である川口義道氏が入社したのは、昭和59年。それまでは、住宅建築資材の製造や販売を行うメーカーに勤務し、14年間事務部門と営業とを経験した。特に後半の7年間は、1年の2／3は出張で全国を飛び回るといって、日々で、人の倍は働き、トップ営業として活躍していたという。そんな川口さんの人生を変えたのが、キリスト教との出会いだった。

川口さんがキリスト教に初めて触れたのは沖縄返還や大学闘争の華やかなりし頃。松山商科大

学へ入学し、台湾へヒッチハイクをしたり、サークル活動ばかりをやりながらフラフラと自由に過ごしていたとき、「人生いかに生きべきか」ということを語ってくれる人に出会う。

その人の生き方、接し方に深く信頼感を抱いた川口さんは、松山教会の山下萬里先生や、三浦綾子の『ちいさな先生』で知られる榎本保郎牧師など、10人くらいを中心に喫茶店などで開かれる“おはなし会”へ参加し始め、キリスト教の教義に感銘を受けるようになったという。

そして、「この先生たちの信じるものならば」と、キリスト教会へ通い始めたけれども、仏教徒で寺の総代もしていた両親は入信を反対。自宅の近くにも小さなキリスト教会（仏生山。今のカナン保育園の場所）ができたことは知っていたものの、「もっと会員数の多い、大きな教会へ行きたい」という思いもあって通うことはなく、大学時代を過ごした。

ところが、大学卒業時、お世話になっていた牧師にその小さな自宅近くの教会へ転籍されてしまい、役員となることに。それを知ったときには、やはり腹が立ったそうだが、「君はもっと小さな教会へ通ってみた方が良い」と後に仲人と



なる。縁のあった先生からも薦められ、そのままそこへ通い始め、地元の建材メーカーへ就職したという。

その後、各地を営業で回りながら充実した社会人生活を送っていた川口さんに転職が訪れたのが、働き始めて13年目、38歳の時。

営業の仕事は楽しく、抜群の業績も上げていたが、子供も成長し、「このままずっと停年まで営業でやっていくのか」と思い始めたところへ、カナン保育園への就職の話が舞い込んできた。

現在の仕事を続けることに迷いはあるものの、保育園という全く違う職種への

転職話に決断をためらう川口さんの背中を押したのは、ちょうどその頃、長崎に来日していたローマ教皇（ヨハネ・パウロ2世）のメッセージだった。平和公園の近くに営業車を停め、ラジオから流れる教皇の声に聞き入った川口さんは、『人生何のためにどう生きるべきか』を語るメッセージに心を打たれ、会社を辞めることを決意したという。

こうして、カナン保育園へ入社した川口さんだが、当時の様子を尋ねると、『毎日が退屈で退屈で…。』との答えが。

「職場は女性ばかりで気も遣うし、事務仕事などしたことがないから、じっと座っていることさえも辛い。もちろんタバコも吸えないし、いくら『将来は園長に』といわれても、仕事を面白いとは思えませんでした。」という。

これではいけないと、「そんなことはしなくてもいい」という周りの声押し切つて、保育士になるために夜間学校へ。3年かけて資格を取り、保育士の指導もできるようになった頃から、仕事が楽しくなってきた。

「楽しくなってくると、学生時代の伝手をたどって大学の先生に来てもらい、職員の勉強会を開催したり…ということもできるようになりました。」

また、その頃、保育所の園長が男性というのはよくあっても、男性なのに保育士の資格を持っているというのは珍しかったんですね。

だから、面白いということでも注目もされたし、活躍の場も広がってきて、12年前の子育てプラザ21（善通寺市）の公募採択や、高松市の十河保育園の事業展開にもつながっていきました。（川口さん）。

そして、保育園の事業者として十分な実績を積んだカナン福祉センターが、今、理想とする新しい事業の形として取り組むのが、高齢者デイサービスと小規模保育園を組み合わせた、10月1日にオープンした「カナンの園」複合施設である。

少子化にもかかわらず、また、少子化から脱出せねばならないからこそ、「成長産業」と位置づけられている子育て支援と、高齢者福祉を組み合わせたこのモデルは、全国で50、100カ所の開設を目指し、国が予算を付けて取り組む事業となるだろうというが、まだ全国的にも珍しい。

その「カナンの園」施設開設に当たり、カナン福祉会が掲げたスローガンは、

『高齢者福祉と保育の統合的ケアを！』である。

「今、国の高齢者福祉の施策は、地域包括ケアによつていきます。手法、考え方はよく分かるけれども、その先の福祉のあり方が見えてきません。介護をする人が、保育も出来る。高齢者と子供を一緒にケアできる。そういったケアのあり方、システムの構築が、20年後30年後には、必ず必要だと思つていきます。」

『香南で暮らそう』の“こうなん”を、“かなん”と読み替えると、聖書で「乳と蜜の流れる場所」と描写される「約束の地」カナンになる。そこには、「ここは過疎地かもしれないけれど、地方で暮らそう、移住して暮らそう、終の棲家を見つけよう」という、カナン福祉センターの思いが込められている。

『「医療と介護」ということが盛んに言われているけれど、医療も介護も、その枠から外れてしまう対象者が多いように感じます。」

それなら、元々カトリックの修道院（旧「ドミニコ会神の母マリア修道院」）だったこの場所で、キリスト教の教えを根底にする自分たちが、高齢者の精神的

なケアをサポートするという目標をしっかりと持って生活を見守るのは、社会福祉法人としての務めではないかと私は思っています。」と川口さんは言う。

今の日本の法制度の場合、社会福祉法人が特別養護老人ホームを運営すれば税金は課税されないが、株式会社があれば老人ホームを運営すると、利益に対して事業税がかかる。しかし、社会福祉法人は設立が難しく、たとえ高い志を持っても、株式会社で運営をせざるを得ないという人が多くいる。

それはおかしい、不公平だ、という声から、おそらく政府の方針も今年度には変わるだろうと言われているが、そのように「社会福祉法人が優遇される分、社会貢献を行わねばならない」という、当たり前すぎて一見馬鹿げているようにも思われる議論も、世の中では大まじめに行われている。

「だからこそ、社会福祉法人として義務を果たさなければいけません。情報開示だって、当たり前だし、ホームページなども開設して、門戸を広く開けておかなければだめです。」

そう話す川口さんの社会福祉法

人としての誇り、意識は、しかし、それだけに止まらない。

「新しい法整備や、それに基づいた新規事業が世の中に誕生するとき、必ず対象者に線引きが行われます。それ（線引き）はどうしても必要なことで、仕方がないけれど、その法整備の隙間、保護の対象の枠からはみ出してしまった人たちを、いったい誰が助けるのか。

その隙間を埋めるのが、社会福祉法人の役割じゃないかと、私は思います。職員の皆さんに、その意図がどこまで伝わ

っているかは分かりませんが…（笑）。行政や企業ではできないことで、社会的に意義のあることをやるのが、社会福祉法人の本来の役割でしょう。

国は、『社会福祉法人だけでは足りない』として、NPO法人など活用してその隙間を埋めようとしてきました。確かに、NPO法人の存在は大きいし、設立の簡単なNPO法人の方が、現実には市民の声を代表することができるのかもしれませんが、

そして、それはある意味、社会福祉法

人にとって存在意義を問われるような脅威でもあるかもしれないけれど、社会福祉法人がその役割を果たしていないことに、そもそもの責任があるんです。

だから、今回の「カナンの園」では、医療と介護、保育の隙間に落ちてしまうかもしれない対象者、弱くされた人々を、私たちが支えるんだという想いがあります。高齢者の、老後一人で暮らすとか、お墓の心配とか、そういった不安事をケアして、最後まで看取ってもら



↑ (上) 旧【ドミニコ会神の母マリア修道院】の壁画。(中) 既存建物部の個性的な屋根のラインと十字架。(下) 畑。右手側には果樹園も。

えるという安心感を提供する。

つまり、医療と介護の隙間に落ち、穴落しているところの精神的なサポートを中心に行っていきたいと考えています。」

【複合施設 カナンの園】には、【住宅型有料老人ホーム カナンの園】、【デイサービス ガレット】、【訪問介護 ニックナック】、【カナン空港子ども園】の四つの施設が併設されている。それぞれの施設名の【ガレット】、【ニックナック】という名前は、この場所の元の所有者である【ドミニコ会神の母マリア修道院】でシスターたちが作っていたお菓子から採ったという。

川口理事長へのインタビューの帰り、その修道院だった頃からあるという柿畑でスタッフさんから柿をいただいた。

「自然が一杯ですごくいいでしょう、ここ。」と笑う女性に、「お庭のテーブルにも柿とミョウガが飾ってあって、素敵だと思いました。」と言うと、「この自然を、果樹園や畑を、私たちは楽しむしかないわよねえ、ってみんな笑っているの。また、柿のなる頃には思い出して遊びに来てくださいね。」と言っていたのだ。

「『^{カナン}香南で暮らそう』」

香南の地域の核として、そして終の棲家として、これから選ばれる場所となるのだろうかと感じた。

社会福祉法人 カナン福祉センター

〒761-1406 高松市香南町西庄 1671-2
TEL.087-815-8070 FAX.087-815-8071
<http://www.kananfukushi.com>

複合施設「カナンの園」

住宅型有料老人ホーム
カナンの園

老人デイサービスセンター
カナンのガレット

訪問介護事業所
カナンのニックナック

小規模保育所
カナン空港こども園

地域とのつながりを大切にし、
様々なネットワークづくりに
取り組みます。

- 子育て支援・介護相談センター
- 提携医療機関による24時間対応
- 修道院時代に建てられた礼拝堂を利用した地域交流ホール
- 小規模保育園の子どもたちとの交流

職員が働きやすく、
利用者様にやさしい施設を
目指します。

「カナンの園に関わるすべての方が幸せ
になること」を目指しています。





新しい『木造』の形を考える

島田治男建築設計事務所(一級建築士事務所)

所長 島田 治男 氏 インタビュー

— 今回の「カナンの園」の計画ですが、当初は、既存の建物を利用して、「高齢者十子供たち」のための施設をお考えだった、と伺いました。

「この敷地は、もともと広い森の中に既存の二棟の建物があつたんです。

表側の棟(注現在、地域交流スペース、保育所として利用)はそのまま改修して転用したけれど、裏側にあつたシスターの寮については取り壊して、今回、有料老人ホームを新築しています。

でも、計画当初は、寮もまだ新しいし、良い建物だから、それをリフォームしようということにしていた。表側にある棟とは、ちよつと雰囲気の違い、高層の建物だったのだけれど...

ところが、何度か計画しても、「良い建物」にならない(笑)。改修費もけっこうかかる。スタッフの動線も悪くなるし、無駄な設備も多くなる。

なので、ある打ち合せの時に、『表の建物だけ残して、裏の寮は潰して新しく建てましょう』というプレゼンテーションを、突然持ってきたんです。」

—突然ですか？

「そう、突然。理事長はびっくりしたと思いますよ。でも、職員さんたちが、『それ、良いですね！』といっぺんで気に



入ってくれた。そして『そうしましうー！』と一気に盛りあがってしまった。」

— 今、完成したのを見ると、新築部分も初めからあつたときか思えないくらい、既存の建物と馴染んでいますね。

「私としても、建物は目立たなくて良い、という考えがあつたから、昔からそこにあつたかのようなデザインにしよう決めていた。

カナン福祉センターさんからも、『こういう風な建物にしてくれ』といった要望は一切なかったですね。私が手がけた建物を見学に行つて説明をしたら、『こういう建物で良いです』と、ただそれだ

け。それ以上デザインについての議論はありませんでした。」

— 建物は目立たなくて良いですか？

「以前は、建物デザインで何かを表現したいと思うこともあつたけれど、今はそうは思わない。ロケーションがデザインを決めると思うから。」

ただ、実は、「カッコイイ」デザインの建物も得意なんですけどね(笑)。例えばカーテンウォールをメインに使った建物も、沢山設計しています。」

— 島田さんは、福祉施設を多く手がけていますが、いつも気をつけている点などはありますか？

「特別に意識している、というよりは、もう自然にできてしまうところもあるけれど、強いて言えば、自然の風光・木の温もりを大切にすることかな。

あとは、福祉施設といつても、私は“住まい”だと思っているから、いかに住まいとして快適に過ごせるか。“住まい”としての視点は、必ず持つようにしていますね。」

— なるほど。島田設計さん、といえば、皆、“木造”のイメージを強く持っているとします。今回のカナンの園も銘建工業さんの集成材を使った木造の建物ですが、なぜ集成材を積極的に使う



↑杉の化粧ルーバーの梁が安定感と温かみを添える。

ようになったのでしょうか。
「元々は、私も集成材は好きではなくて、無垢の木だからこそ、という思いがあった。そもそもその木じゃなければ、と。」

でも、ある時、『建物を全て数値で出してほしい』というお客さまに出会ったんです。エンジニアの男性だったけれど、強度から何から、とにかく“数値”で見せてほしいと言っわけです。

でも、木材の強度なんて、完璧に数値で表すことはできない。技術だって、大工の腕次第というところもあるから、

数字には置き換えられない。普通なら、『それが不安だと、木造はやめた方が良いでしょう』と言いたるところだけど、そのお客さまは、『でも、木造で作りたい』と言う。

その時、『そんな切り口（視点）で木造を考えるなんて、初めて聞いた』と思ったけれど、『なるほどな』とも思った。

だから、考えたんです。木造を数字に置き換えるなら、集成材と金物工法しかない。集成材なら均一に強度が出るし、金物なら大工の腕は関係ない。

…そう考えて、郷原の中国木材へ見に

行つたわけです。」

「中国木材さんへ行つて、なぜ『無垢材でなければ』という想いが変わったんですか？」

「それは、中国木材さんの工場を見て、『この会社、本気でやつとるわ』と、感動したからです。集成材を生産しているわけだけど、それが全量履歴・全量チェックなんです。驚きましたね。」

しかも、ここは『外材』を売りたいわけじゃない。日本の木を何とかしよう、日本の林業を元気にしたい、と本気で考えている。それを直に見て、『あ、これなら集成材もええな』と素直に思えるようになった。」

—それ以来、福祉施設や保育園などの特殊な建物や大規模建築でも、木造を薦めるようになったのですか？

「そう。鉄骨でやりたいという人でも、木造で作られた建物を実際に見せれば、『木造が良い』となる人が多いですよ。『木造でも建設できる』ことを知らないから、鉄骨で、と言っていることも多いんです。」

ただし、木への理解は必要ですね。自然素材なので、色や節など、どうしても均一

にはいかない。だから、建てる前には必ず他の建物を見に行つてもらいます。

また、鉄骨ほどスパンが飛ばせない。特注で集成材を作ればある程度できるけど、金物や集成材を特注品にすると、コストがものすごく高くなる。既製品の材料をいかに上手く組み合わせ、取り入れるかが、木造の特殊建物を実現するために大事になるわけです。『木造にするから高くなるのはしょうがない』では、選んでももらえませんか。

あ、でも、時々、『どうしても鉄骨が良い！』という人もいますよ。この間、スーパの設計計画の時に木造を提案したけど、受け入れてもらえませんでしたね。日本初に近いと思うから話題にもなるし、ご来店くださるお客さまにも居心地が良いだろうと思ったのだけど、柱が1本でもあるとレイアウトが自由



↑住まいとしての居室部分。



にならないからイヤだと言ったことで。海外には、そういう集成材をむき出しにしたようなスーパースペースがあつて、すごく格好いいですね(笑)。」

「じゃあ、その海外のスーパースペースを島田さんとお客さままで一緒に見に行つて…。」

「お、そういう手があつたか(笑)。」
「ただ、木造だと制約もあるのですよ」

ね？

「燃え代計算等をきちんとやれば、ある程度クリアできることも多いけれど、大規模なものになると、消防法などが係わってくるから、やっぱり制約はありますね。」

でも、それはどうすればクリアできるかを考えて、解決していくしかない。お客さまにどうしようか、と相談しても困るだろうし、とにかく考えて、こちらから解決法を提案していく。」

「燃え代計算というと、先般大豊で見た、銘建工業さんの集合住宅(社員寮)がすぐに思い浮かびますが、建築中のあの建物は、私には木造とは思えないくらいでした！分厚いパネルで組み立てられて重量感があつて、“固まり”としてしか捉えられないくらいで…。」

「建物の全てに木の質感を出してしまうと、重い感じになるから。目

に見える部分の半分くらいのボリュームが木、というのがバランスが良いかな。」
「パネルと言えど、以前、島田さんの設計の施設で、クロスミナのパネルを使って、先進的技術の利用…といった項目の助成金を取得していたような記憶があります。」

「あれは、建築主さんの予算を少しでもカバーするために、補助金を取ろう！ということでスタートしたんだね。」

「予算をカバーするためですか？遠大な計画ですね(笑)。」

「たしかに(笑)。でも、補助金申請に必要なデータや資料を集めていく過程では、大学(今回は京都大学)と一緒に実験を行い、素材の特性を改めて数値化し、実証していくわけです。」

すごく大きな研究施設で、何十人もが張り付いて実験を行い、技術を客観的に公に認められる形にして世の中に出していく、ということには、すごく意味がある。」

「社会性を持つということですか？」

「そう。良い技術を公に広げていく…ということには、社会的な意味があるね。」

「ずいぶん木造の技術や材料もポピュ

ラーになって来たようにも見えますけど、お客さまが「木造でやりたい」と言ったら、大抵の建物は叶えられるものなのでしょうか？」

「どうだろうなあ。木造にすることにより生まれてくる色々な制約を解決して行くのは、それなりの労力があることだから、できない場合もあるかもしれない。」

でも、特殊な木造建築を難しくしている大きな要因は、木材が安定的に手に入らないことだと思う。たとえば、鉄骨造なんかだと、図面を描けばすぐに現場説明会を開催して見積もりして発注ができるけど、木造はそれができないからね。」

「そうなのですか？」

「木材が確実に手に入らないから、すぐにはできない。日本の林業は、そこまです成長していないから。」

ヨーロッパは、石や鉄の文化と思われがちだけど、むしろ木を使い尽くした結果、そうなたつと言つてもいい。その分、木材利用の先進国でもある。【里山資本主義】などでも採り上げられて、有名になつたけれど。」

でも、日本の木材は、利用できるようになるまでにロシア並みのコストがかか

る、という計算もあるくらい、遅れているんです。

林野庁の方針として、木材の自給率を5割に上げていく…という目標が掲げられているものの、なかなか難しい。」

なぜですか？

「うーん、流通を変えないと。今は、材料の調達がすぐにはできない状況になっているから…。木材業界の仕組みとして、安定的に生産できないんだね。でも、それではなかなか建築には使えない。」

—それって、木材業界から言わせれば、「いつ売れるか分からないのに、どんどん供給なんてできない」となりそうなの。ニワトリが先か卵が先かの議論になりませんか？

「それも言えるけど、『供給が確実』ということは絶対に必要。でも、それに気づいて、『必ず何万立米かは出荷する』という木材業者も、今は生まれてきたけれどね。」

—では、それで木材業界は変わりますか？「木造」について、設計者や工務店が積極的に発信して、需要を創り出す動きも必要な気がするんですけど…。「ひと口に“木造が良い”といつても、在来工法と集成材を使った金物工法では、感覚的な差を感じる人たちはいるだろうね。無垢材と集成材とを同列に考えることに抵抗を持っている人は、多いと思う。」

集成材なら大規模建築も作れるから、ヨーロッパでは木造の高層マンションなどもあるくらいだけれど、日本はそのあたりは後進国とも言えるから、どうしても木造を選択する場合が少なくなっている。」

—一般の人の意識はどうでしょう？

「一般の人の場合は、とりあえず、『木造でも大規模建築物ができる』と認識している人自体が、きつと少ないよね。弱いし燃えるし、無理でしょう、みたいな。」

実際には、火事の時に溶け落ちてしまいう鉄骨よりも、木造の方が安全だったりするのだけれど…。だから、海外では、むしろ木造の方が火災保険が安くなるらしいって聞いたことがあるなあ。」

—建設業界にできることって、何でしょうか。「これからは、設計者が“材料の選択肢が色々ある”ということを建築主さんに伝える努力が必要なのかもしれないね。“価値感の選択肢を提示する”というか。建設業界全体の意識の底上げも必要でしょう。」

木質系バイオマスが話題になっているけれど、それでイコール日本の林業を元気にできるわけじゃないから、そうやって“木造”についての社会の意識を変えていくことに、日本の林業を変えるカギがあるのかもしれない。

私は、今の林業を本当に良くするのは、大規模に木材を生産し消費しようという取り組みではなく、地域で小さく木材を利用し回していく、夢のある仕組みなんだと思うなあ。」

—なるほど。では、最後に、島田さんのこれからやってみたいことを教えてください。

「木材利用の先進国であるヨーロッパみたいに、木造での集合住宅とか、いいね。」

先日『建てたいんです！』という方にお会いしたから、そのうち計画ができるかもしれないよ(笑)。」

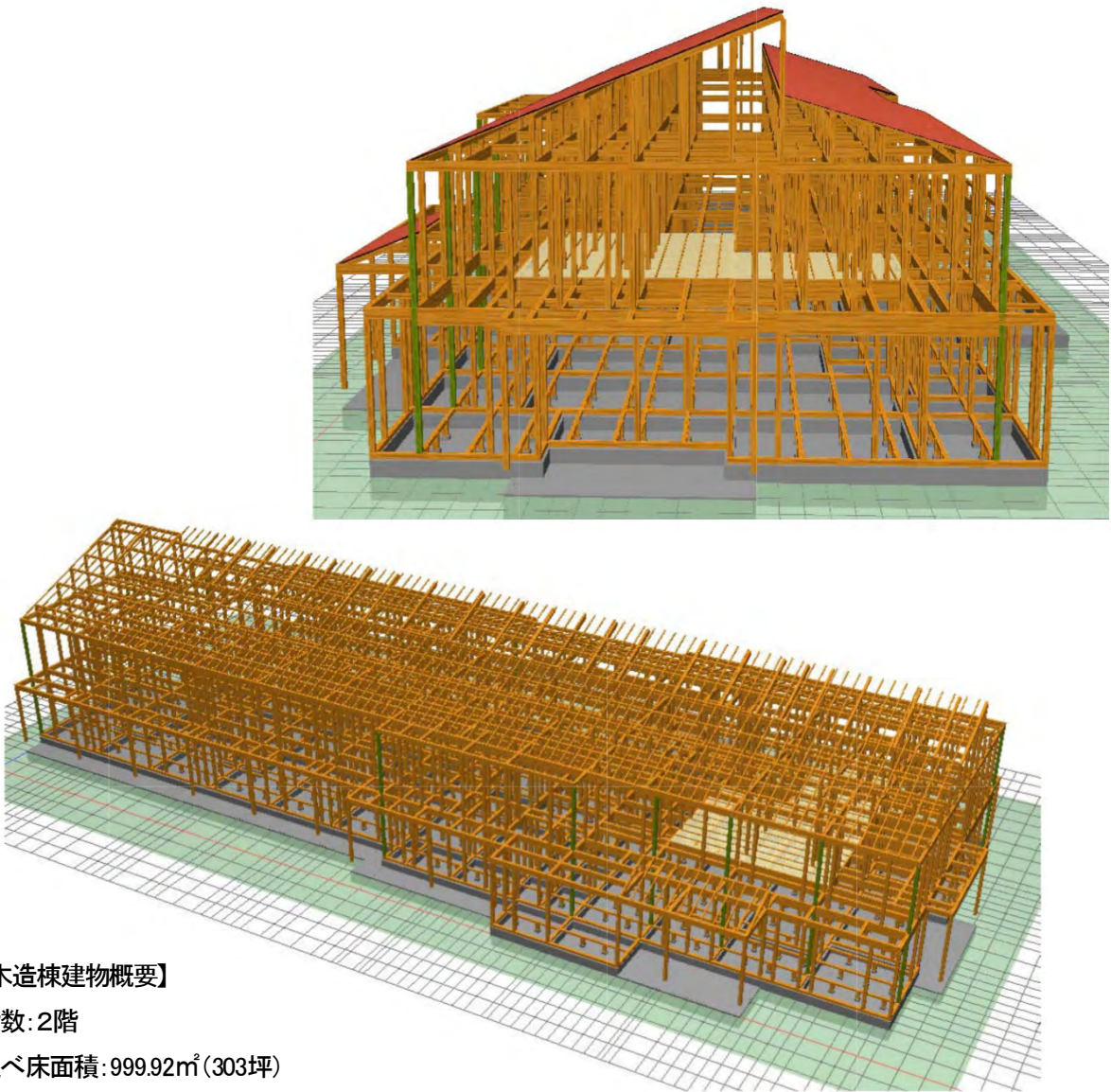
—楽しみにしています！

(島田建築設計事務所
所長 島田治男氏より
お話をうかがった)



↑住居棟の共用部分。

●カナンの園 構造的特徴 (銘建工業作成の資料より)



【木造棟建物概要】

階数: 2階

延べ床面積: 999.92㎡ (303坪)

構造種別: 木造準耐火建築物(準耐火性能45分)

【特徴】

- ・大断面集成材と製材併用の在来軸組工法
- ・杉集成材厚板パネルを、耐力要素兼天井化粧材として採用
- ・既製品をうまく利用することでコスト削減を実現
- ・杉集成材厚板パネルは防火被覆材としても使用できるため、「現し(注: 覆ってしまわずそのまま見せる)」としての利用が可能
- ・グリッド(注: 方眼。設計の基準となっている寸法のようなもの)に合わせて集成材、製材を適材適所に配置することで、効率的な構造計画が実現

(カナンの園 構造見学会の際に配布された銘建工業作成の資料より抜粋)

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。(24)

【季節に応じた暮らし方／季節をかたどる吹き寄せ】

この季節、和菓子屋さんへ行くと目を惹く「吹き寄せ」。

「吹き寄せ」という言葉を聞くだけで、風に集められたとりどりの色づいた葉っぱの画が浮かぶような、そんな風情のある呼び名ですが、その名の通り、イチヨウやモミジの葉を模した寒天・落雁のような干菓子や、小さなおせんべいを竹籠や可愛らしい箱に詰め合わせたお菓子が「吹き寄せ」です。

「秋が深まり、風に吹き寄せられた落ち葉をお菓子で表現したもの」と言われていますが、もともとは売れ残りの干菓子を集めて売った始末の知恵から生まれたものとも言われています。

◆ 干菓子とは

この「吹き寄せ」に入っているのは、いわゆる「干菓子」と呼ばれているもの。関東の場合には昆布なども入るそうですが、こちらではあまり見かけません。

干菓子とは、「生菓子」に対応する和菓子の総称で、その名の通り水分の少ない乾燥した菓子のこと。落雁、有平糖、金平

糖、和三盆、煎餅、おこし、甘納豆、五色豆などが代表的で、和菓子屋さんへ行けば、カナルで可愛い品が並んでいます。

普段から懐に入れて、口寂しいときに食べる菓子としても親しまれてきたそう。たとえば野点の時に使う「振り出し」という携帯用の菓子器には、小さな豆菓子や金平糖が入れられています。

◆ 落雁の歴史

お茶席で供される場合をはじめ、干菓子でもっともよく目にする「落雁」。その歴史は古く、室町時代に遡ります。法事の際にお供え物として使われる「はくせいこ(白雪羹)」とは加熱のタイミングが違っていて、落雁の場合、先に火を通した米粉を使い、白雪羹の場合は、成形してから加熱します。

江戸時代に加賀藩が大々的に製菓事業を奨励したこと、金沢では今も和菓子が有名ですが、茶の湯好きで知られる松平不昧公のお膝元・松江でも、数々の銘菓が遺されています。

◆ 和三盆糖

一七〇〇年代末に精糖技術が確立されたという「和三盆糖」。香川県では殊にこの和三盆糖が有名ですが、今も江戸時代と変わらない伝統的な精糖方法で作られ続けています。

この質の良い砂糖の誕生が、全国の和菓子の発展に大いに寄与したことは勿論ですが、ほどよい甘さと口溶けから、加工せずに和三盆糖だけを押し固めたお菓子のあり、今も落雁と並んで人気の菓子のひとつとなっています。また、最近では、これを使った「干菓子作り体験」も盛んで、高松市の菓子木型の伝統工芸士さんが親子で活躍していることから、ワークショップなど、和菓子文化を広めるための活動も行われています。



その他、同じように和食の世界でも、様々な木の葉が吹き寄せられた様に見立てて、幾種類かの野菜の煮物や揚げ物、湯葉、キノコ、銀杏などを美しく盛り合わせた料理を「吹き寄せ」と呼ぶ他、型で抜いたサツマイモやニンジンを使って炊き込みごはんを彩るなど、盛りつけを「吹き寄せ」に見立てる工夫で、さまざまに「吹き寄せ料理」が生まれてきているようです。

お菓子の「吹き寄せ」の詰め合わせの中心はお店によって様々ですが、このあたりでは、栗、松かさ、キノコ、イチヨウ、松葉紅葉などの甘い干菓子を中心に煎餅などを詰め合せたものをよく見かけます。

塩味の煎餅入りのものなど、個性あるものもあるようですので、色々と探して見たいかがでしょうか。

見て楽しめる「吹き寄せ」、ちょっとした手土産にもピッタリですよ。

「花の歳時記（24）観潮楼」

江戸時代に皇族や諸大名が競って造営した池泉回遊式庭園には、茶室・茶庭が不可欠の要素でありました。この中津万象園も築庭当初は「中津の御茶屋」と呼ばれていたように多くの茶室が林泉の要所に配置されていましたが、現存している茶室は池泉の北西部に位置している「母屋」と茶室「観潮楼」の二棟のみとなりました。

この茶室は園の景観の要として重要な役割を果たしていますが、池泉の西側から「観潮楼」の横顔を望む景も捨てがたいものがあります。特に晩秋ともなれば茶室周辺のモミジやハゼノキが一斉に紅葉して、一年で最も華やかに彩られます。

＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
瀬戸中央道路 坂出北ICより約8.5km／約15分
坂出ICより約14km／約20分
高速道路善通寺ICより約5km 約10分



（七言絶句 訳）

池の水は岸边の竹を潤して枝は翠に映え、庭の楓は霜を受けその葉は真紅に燃えている。簾を巻き上げると茶室には秋の光が射し込み、欄干に寄りかかると雲影が盆の中に浮んでいる。

【長岡 公 氏】

昭和2年10月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
昭和26年3月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
昭和26年4月以降 香川県公立高等学校教員として主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校・飯山高等学校教頭
昭和63年3月 定年退職 香川西高等学校教頭
現在 公益財団法人中津万象園保勝会 理事
※主な著書に「讃岐の名園紀行」（栗林 玉藻編／中 西謙編）がある。

この景を見るにつけ、約二百年前丸亀

京極藩中興の藩主として名を馳せた六代目

藩主高朗侯が、しばしば中津別館を訪れ、

琴峰詩鈔に多くの漢詩を残したことを思い

出します。それらの中で、晩秋この茶室「観

潮楼」で詠んだと思われる「中津即興」と

題した漢詩七言絶句の一部をご紹介させて

いただきます。

水南岸竹枝々翠 霜染庭楓葉々紅
捲箔日光来席上 凭欄雲影落杯中

（長岡 公）

雅題 文人華の世界（2）

「園林秋容」

橙と柿



——中津万象園の茶室・観潮楼にちなんで、

文人の「華」をご紹介致します——

（但し、流派が多いため、それに拘らず
楽しい雅題を選びご紹介しています）

「園の中はすっかり秋色になった」

：そんな秋の景色へ寄せる思いを、2種の風雅な樹木によって表現した取り合わせが、この「園林秋容」だそうです。

【編集後記】

たぶん、私たちの世代はみんな多分だと思うのですが、「社会問題に向き合い、解決のための何かをしたい」という気持ちが強くあります。建物を通じて、まちづくりを通じて、観光を通じて……と色々なことを考えますが、それにはまず、前提となる『問題意識』が必要です。でも、そもそも私の感じている問題意識は正しいのかな？：そんなことを考えていたとき、「あなたは『社会を変えたい』のか、『社会に良さをうけたい』だけなのか？」というフレーズに出会いました。

今回の『物語のある建築』で特集したお二人は、どちらも、『問題意識』を地に足のついた形で持ち、自分の職業の延長線上でそれを解決しようとしている人たちです。これから先、『社会起業家』と呼ばれる人たちはほとんど生まれてくるでしょう。そういった新しい世代の人たちと、現実社会問題と向き合い、解決のための緒を探り実行してきた、今第一線で活躍している人たちが同じステージで力を貸し合える時代になったとき、きっと社会は大きく変わるのだろう、とワクワクしています。

*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



建設業許可：香川県知事許可（特23）第189号
／一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号
号／宅地建物取引業免許：香川県知事登録（10）第1997号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101 三豊市詫間町詫間 300 番地 1
TEL0875-83-2588(0120-832589)

FAX0875-83-5864

http://www.fujikensetsu.jp

mail y-manabe@fujikensetsu.jp（真鍋有紀子）

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

■営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所

■中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭